

## 新刊紹介

黒岩康博

### 『好古の瘴気 近代奈良の蒐集家と郷土研究』

(慶応義塾大学出版会、二〇一七年)

佐藤 雄基

本書は、近代奈良を舞台にして、郷土で研究する蒐集家たちとその研究の諸相を論じたものである。近代日本における郷土史研究については、しばしば国民国家論的な語りがなされることがある。すなわち、地域における歴史意識が国民統合とどう関わるのか、中央のアカデミズムと地方郷土史家との関わり、近代的な学知が下降拡散するプロセス、さらには勤王の武士への顕彰運動を通じて皇国史観の社会的基盤が形成されたことなどが論じられている。だが、郷土の人びとにとつての歴史とは何であったのか、その歴史実践の地域ごとの具体像については十分に明らかにされているとはいいがたい。本書は奈良という郷土において、あくなき蒐集・踏査を続ける人々とそのネットワークを生きた生きと描きあげている。

本書は以下、大きく三パーツに区分される八章から成る。

序章 郷土に何が起こったか

顕彰のモニュメント

第一章 平城神宮創建計画と奈良

第二章 南朝史蹟の考証と地域社会

師範ネットワークと雑誌

第三章 高田十郎『なら』に見る近代大和の「地域研

究」ネットワーク

第四章 「うまし国奈良」の形成と万葉地理研究

第五章 奈良万葉植物園の創設過程

第六章 蒐集家崎山卯左衛門の郷土研究

雄飛する心身

第七章 雑誌『寧楽』の仏教美術研究

第八章 宮武正道の「語学道楽」

付録 インドネシアからの手紙―兵士と言語研究者―

序章では各章の内容が簡潔にまとめられている。何れの論考も、主に奈良県内の所蔵機関に伝わる新史料の発見・研究に基づくものであり、新たに知られるようになった人々の営みのもつ魅力に満ち溢れている。

第一章・第二章から成る「顕彰のモニュメント」では、日本の近代国家が「旧都」としてナショナルアイデンティティの中核に据えようとした奈良の地にあつて、神社の創

建と南朝史蹟の顕彰を行おうとする人々の動きを論じたものである。近代学知と結びついた近代国家の構想が実現される場としてではなく、奈良という場に密着した「土着」の知が、予想外の動態を見せる現場の動態を描く。

「師範ネットワークと雑誌」としてまとめられている第三章から第六章までは、金石文・考古遺物研究といった「モノ」を軸とした郷土史研究を実践した県師範教員高田十郎とその教え子たちの活動を探っている。文化財保存の動きは、しばしば中央の内務官僚や学者たちの視点で語られがちであるが、県内各地の小学校教員となった奈良県師範学校の卒業生ネットワークを一つの軸として、地域の側で捉える視点は重要である。第六章で明らかにされた小学校の郷土室の存在は、奈良だけではなく各地の郷土史研究においても重要な役割を果たしたと思われるが、各地の学校の統廃合が進む現状を考えると、その基礎研究は喫緊の課題であるのかもしれない。

「雄飛する心身」と題された第七章・第八章は、モノと知識を求めて海外へとつながっていった仏教研究者・学僧や「語学道楽」者の姿を描く。彼らの活動は「帝国日本」の版図拡大を既与の条件としていたが、モノへの執着を手掛かりにして一国的美術史を抜け出す視野をもちえた点などは興味深い（二六八頁）。また、天理教の海外布教の

ためにつくられた天理外国語学校で、宮武正道がマレー語を学んだという第八章の指摘は、第七章でみた大屋徳城の事例にみえるような宗教的なネットワークが、国をこえた視野を奈良という土地にもたらしたという点で興味深い。付録は宮武正道宛てのインドネシアからの軍事郵便四八通を翻刻したもの。

近年における史学史研究の特徴の一つに、大学における専門的な歴史研究だけではなく、社会における歴史の受容や多様な歴史実践を視野に入れていく点が挙げられる。評者も寄稿した松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィ』（山川出版社、二〇一五年）は、政府の修史事業、史料探訪、旧大名家・華族の修史事業、そして地域における偽史言説を含めて、多様な歴史実践を視野に入れたものである。小澤実編『近代日本の偽史言説』（勉誠出版、二〇一七年）では、荒唐無稽な偽史言説が、近代国家における「伝統の創出」とは一線を画しつつ、近代日本において流布され、社会的な影響力を持ちえた様相が描かれている。本書で描かれた奈良の蒐集家たちは、奈良という場に密着し、その地に伝わるモノへの執着に拠って立つ。それだけに、ナシヨナリズムや偽史言説のように、奇想天外な面白さや不特定多数に広がっていく熱狂とは異なり、土地に根つきながら静かに広がっていく。社会における歴史意

識を考えるときに、こうしたものを明らかにすることこそ重要なかもしれない。

個人的には、その地に伝わったモノというとき、それが金石文や考古遺物研究であって、アカデミズム歴史学が重視した古文書にそれほど目が向けられていない点が気になった。久留島浩ほか編『文人世界の光芒と古都奈良』（思文閣出版、二〇〇九年）で描かれた「大和の生き字引・水木要太郎」のように古文書の蒐集家も奈良にはいたが、彼らは蒐集に努めるだけで、蒐集した古文書を用いて地域の歴史を再現するような方向には向かわなかったのだろうか。「古都」における日本の伝統を体現するのは、美術品や考古遺物、さらには文学作品の世界であって、断片的な古文書の解説を通じて歴史家が復元する史実の世界ではなかったのだろうか。そうだとしたら、それは何故なのだろうか。

古文書を重視する歴史学との関わりでいえば、第四章での歌碑の話が重要であると思われる。名所の風景の変化に写真が果たした役割などとともに、大正末から国史関係者よりもむしろ国文関係者のほうが飛鳥の万葉歌枕を巡歴するようになったという記述が興味深かった。評者は調査先において歌碑の類をよく目にするが、中世史研究者は（その歌が確かにこの場所で詠まれたという「史実」を証明す

るものではないからか）必ずしも歌碑を「史跡」として重視しないきらいがある。日本文学の研究者が、歌碑を目あてに巡検をする様子を見て、評者も「仮にこの場所でこの歌が詠まれたのだとしても、景観は歴史的に変化していくものだから、同じ光景を過去の作者もみて、この歌を詠んだとは限らないのに」と思ってしまったことがある。このように歴史研究者と文学研究者とのあいだの一種の《温度差》もまた、歌碑・名所をめぐる歴史意識のあり方を探る切り口になるかもしれない。

（本学文学部准教授）